

## 標津町そして知床を巡るポーターツーリズム

国境写真家 齊藤マサヨシ

「鮭（サケ）の聖地」と染められた旗が国道沿いに立ち並び、オホーツク海からの浜風になびいている。

北海道の知床半島のつけ根にある標津町に来ている。標津町ははじめ羅臼町、別海町、根室市などにまたがる根室海峡は鮭（サケ）の聖地として日本遺産に認定されている。

この地は遙か1万年以上の昔からサケは人々と共にあって、今も続いている。大海原と母川を往来するサケは時代を超えて人々の暮らしを支えて来た。縄文人も現代人も、この大自然の恵みである鮭が暮らしの糧となっている。

サケの恩恵は地元民だけではない。いつかのテレビ番組で標津町のサケ漁業に季節労働する若者を取り上げていた。7月から10月までの最盛期には全国から集まってくる。短期間で高収入を得た若者は、世界旅行やバイクで日本列島ツーリングなど思い思いの夢を実現させていた。そんな夢をかなえるのもサケである。

端っこの町が活気づくと日本列島全体に波及していく。今年のJIBSN（境界地域研究ネットワーク JAPAN）2023 セミナーは10月21日から22日の2日間、標津町で開催された。

セミナーに先立ち関係者40人ほどが標津町内を視察。私たちを乗せたバスが最初についたのは港の傍にある北方領土館。

北方領土館の1階は北方四島の戦前の様子や四島交流の写真パネルが展示されている。2階は展望台になっていて「国後島まで24km」と書かれた看板の横に大型の望遠鏡が2台置かれている。この日は快晴で国後島の南端ケラムイ岬やノツエト崎をはっきり見ることができた。この展望台から見る国後は「島」でなく北海道と地続きの「半島」ではないか思えてきた。



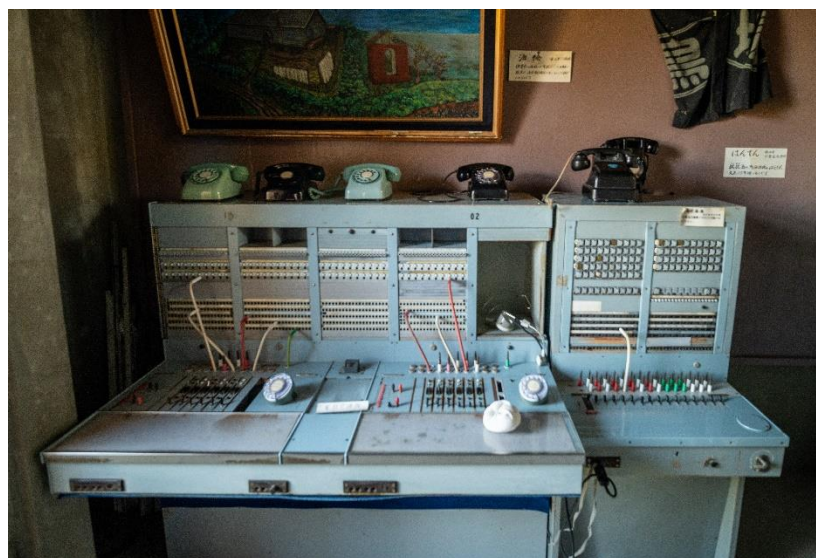
(標津町北方領土館の展望台)

私たちを乗せたバスはポー川史跡自然公園に来た。サケが遡上する標津川と虫類川に挟まれたこの地域は冷涼な湧き水が豊富でミズナラなどの森が広がっている。縄文人、そしてアイヌにとって豊かに暮らせる大地のオアシスであった。

このポー川史跡自然公園の一画に開拓の村があって、そこに煉瓦造りの小さな建物が復元されている。この施設は1897年北海道と国後島を結ぶ海底電信基地として標津川の河口近くに建てられた。標津町と国後島泊村を海底ケーブルの敷設が試みられたが海流や流氷などの影響で失敗に終わった。幻の陸揚げ施設である。その後海底ケーブルの敷設は場所を根室市のハッタラ浜と国後島のケラムイ岬に変えて1929年に開通した。根室市のハッタラ浜に今も残る海底ケーブル陸揚げ施設は、ソ連軍の四島侵攻を伝えた遺産として地元の人々によって大切に保存されている。



(復元された海底電信基地施設)



(海底電信基地施設の内部)

北方領土のカリスマ語り部福澤英雄さんの講話を聞く機会に恵まれた。

福澤英雄さんは5歳の時に歯舞群島の多楽島を漁船で命がけの脱出を経験した。福澤さんの祖父は富山県の黒部出身で北前船の乗組員として北海道に来た。昆布が豊富な歯舞群島の多楽島に定住、以来福澤家は多楽島で昆布漁師として暮らして来た。

そんな平和な暮らしが1945年8月の終戦後に破られることになった。銃を構えたソ連兵が土足で家に上がってきて、家の中を物色して仏壇の御りん等を持ち去った。福澤さんは恐怖で身動きできなかったと語る。

その後、北海道標津町に引き揚げた福澤さんは一家の大黒柱として必死に働く毎日であった。そんな折、役場の担当者から電話があって北方四島との交流事業をすることになったので、ロシア人を受け入れてくれないかとのことであった。はじめは悩んだが、北方領土の問題を解決するためには、お互いが理解し合わなければだめだとの思いから受け入れる決断をした。

実際に北方四島に居住するロシア人を家族の一員として受け入れ、食事をしたり、着物を着せ、書道を教えたりした。北方四島に住むロシア人はどんな考えなのかと思い、好きな言葉を毛筆で書かせたら「自由」「平和」などと書いた。私たちと同じ考えなのだと思います。それからはロシア人を積極的に受け入れ、墓参団に何度も参加した。



(北方領土のカリスマ語り部福澤英雄さん)



しかし、ロシアのウクライナ侵攻は長年積み上げてきた交流を断ち切ってしまった。今は親しくしていたロシア人との交流も途絶えてしまった。そして福澤さんは語る。戦争はいつか終わる。その時は北方領土の返還を求めるための交流事業も再開しなければならない。

福澤英雄さんの話を聞いた後、私たちは標津サーモン科学館を訪ねた。日本遺産「鮭（サケ）の聖地」の拠点となる施設だ。地上30mの展望台のあるモダンな施設の前には北方領土返還を啓発するモニュメントがある。説明版には対話と交流を意味するとあった。ロシア語の説明もある。施設の1階はサケを中心とした水族館で2階は鮭の聖地エキシビションルームになっている。



(標津サーモン科学館前のモニュメント)

エキシビションルームには江戸時代末期の標津を描いた標津番屋屏風（複製）が展示されている。そこには人々が大量のサケを塩蔵するに大忙しの町の様子が描かれている。



(屏風に描かれた標津神社の四爪錨)



(標津番屋屏風)

屏風の中には土部津神社（標津神社）があって、社殿の横には大きな錨が描かれている。この錨は今も標津神社のシンボルとして祀られている。

私たちは展望台に上った。展望台からは国後島をくっきりと望むことができた。

国後島から少し左側に離れた地平線には虹がかかっている。快晴の空に虹があるのは珍しい。北方領土への虹の架け橋ではと思った。

サーモンステーキの昼食をいただいてから午後のセミナー会場へと向かった。

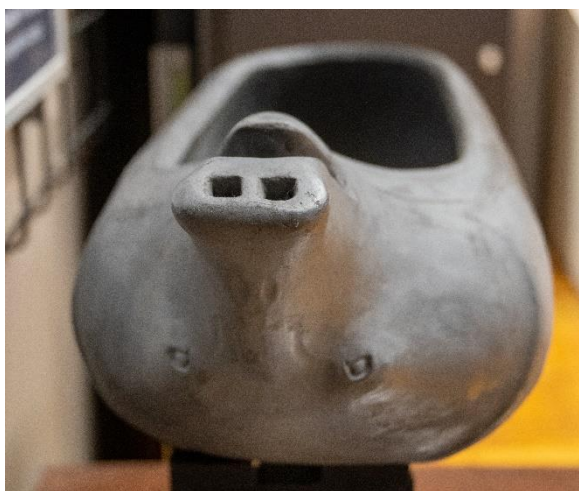


(標津サーモン科学館展望台から見た国後島と虹の架け橋)

午後からは標津町文化ホールで JIBSN2023 セミナーが行われた。テーマは「境界地域の移住と観光を考える」で地元の標津町はじめ、稚内市、根室市、五島市、対馬市、与那国町、竹富町、オンラインで礼文町、小笠原村、多良間村が参加して活発な意見交換が行われた。夜は地元の料理を味わって懇親を深め、この日の日程を終えた。

10月22日、この日も快晴。私たちを乗せたバスは知床へと向かった。

最初に訪ねたのは羅臼町郷土資料館。ここには他では見ることが出来ないオホーツク文化の貴重な資料がある。それは松法川北岸から出土した木製の品々で国の重要文化財に指定されている。オホーツク人の住宅が火事に遭い、木製品が炭化したことで朽ちることなく現在に残されたのである。中でも「熊頭注口木製槽」は独特の形をしている。どのような目的で使われたのかは定かでない。私は勝手に想像して見た。この辺りでとれる山ぶどうで作った葡萄酒をこの器に入れて受け皿に注いでオホーツク人の賑やかな宴会に使ったのではなかろうかと妄想した。



(復元された熊頭注口木製槽)

郷土資料館を出た私たちは国後島を一望できる羅臼町展望台へと向かった。

展望台は、羅臼町の市街地から曲がりくねった急な坂道を登り切った場所にあった。ここから国後島を見ると、標津町から見える島の形とは異なり、南北に長い島であることが良く分かる。

展望台には小さなホールがある。私たちはここで協紀美夫さん（元羅臼町長、前千島列島居住者連盟理事長）の講話を聴くことが出来た。国後島出身の脇さんは長年にわたって北方領土返還運動の先頭に立って尽力してきた。ウクライナ戦争で日ロ間が冷え切ってしまった。とくに日ロ安全操業協定の履行は羅臼町の漁業者にとって死活問題となっている。脇さんは北方領土返還運動を次の世代へ引き継いで行くのが大切だと力説した。



(北方領土について語る脇紀美夫さん)

脇さんの講話を聞いた後、私たちは羅臼から宇登呂に通じる知床横断道路へと向かった。朝のうちは凍結のため閉鎖されていたが午前9時に解除された。この道路は冬期間には閉鎖される。この日はシーズン最後となるかもしれない、そんな機会に恵まれた。



(突然現れたヒグマの親子)

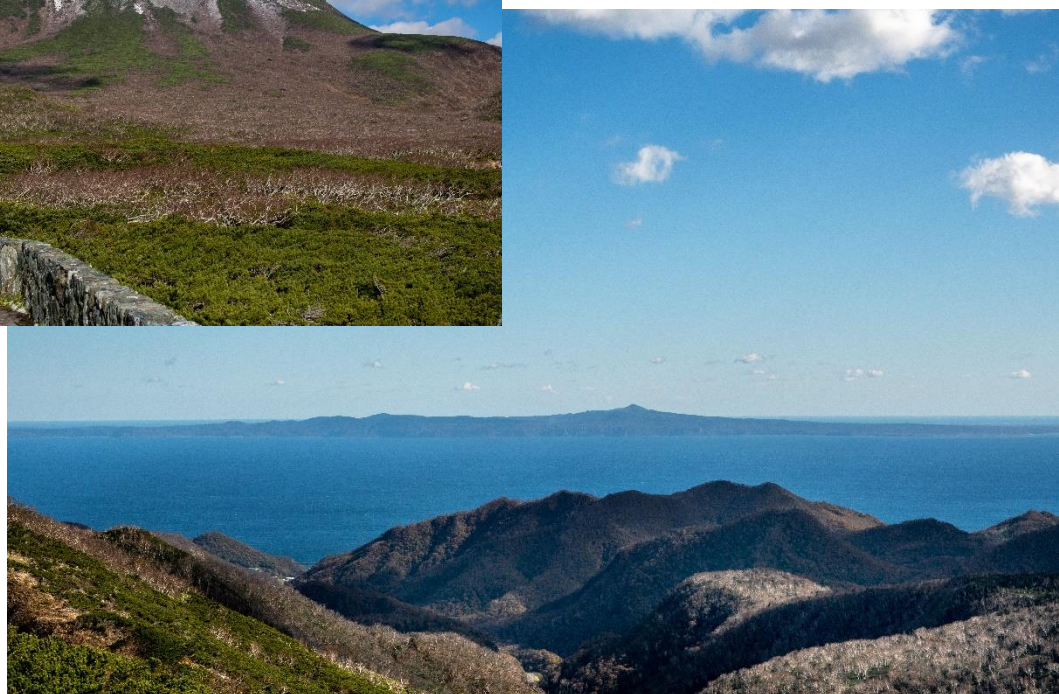
私たちはバスを降りて羅臼岳をバックに記念撮影した。外の空気は少しひんやりとしていた。国後島もくっきりと姿を見せていた。

羅臼の市街地から秘湯「熊の湯」を左手に見て知床峠を目指す。紅葉の山谷が続いている。突然、道路の中央を悠然と歩くヒグマの親子に出遭った。バスは一時停車、車内は騒然となった。間もなくヒグマの親子は進行方向右手の笹藪に消えた。ヒグマ生息密度が高い知床でもめったにない光景である。毎日のように運行しているバスの運転手はヒグマに出遭うのは今年3回目ですと話していた。

バスは知床峠に着いた。知床半島の最高峰の羅臼岳(1,661m)山頂付近が薄っすらと雪化粧していた。何とも優美



(羅臼岳)



(知床峠から見えた国後島)



(サケのちゃんちゃん焼き)

立公園つながりで姉妹町を1978年に締結している。博物館内には姉妹町・友好都市交流館があって竹富町の民家が再現されている。管内には弘前の数多くのねぶたが展示保管されている。斜里は幕末に津軽藩兵が北方警備した場所で多くの藩士がこの地で殉難している。こんなつながりで斜里町と弘前市は友好都市締結をしている。斜里町では毎年夏に「しれとこ斜里ねぶた祭り」を開催して北国の夏を熱くしている。

私たちを乗せたバスは知床峠を下って宇登呂を通過、昼食会場である斜里町のレストランに到着した。店の中央では鉄板の上で湯気をあげてサケの「ちゃんちゃん焼き」がつけられていた。店の人が「今朝獲れたサケですよ！」とPRしていた。

サケステーキにサケのちゃんちゃん焼きと「鮭の聖地」ならではの新鮮なサケ料理を満喫した旅となった。

昼食後、最後の訪問となる斜里町知床博物館にきた。北海道斜里町と沖縄県竹富町は



(竹富町の民家を再現した展示)

2023年10月21日から22日の2日間、標津町そして知床を巡るゴーターリズムは終わった。私たちは普段の生活で北方領土返還運動は少し遠い存在になっている。しかし、この地に来ると暮らしと密着した身近な問題であることが身に染みて感じた。そして、知床は懐の深い大自然であることを体感した旅でもあった。



(斜里の夏祭りにつかうねぶたが保管されている)